

# 町長

## ひとくごと

(44)

齊藤讓

暦のうえでは、八月八日が立秋であるが、これを疾うに過ぎた益明けの今でも、連日うだるような暑さが続いている。予想通りの暑い夏である。しかし、日中の陽の光や、朝夕の風の流れには、どこことなく秋の気配が感じられるようになった。

秋立ちぬ。いよいよ秋のはじまりである。思わず古今和歌集の一首が、頭を過る。

秋来ぬと  
目にはさやかに  
見えねども  
風の音にぞ  
おどろかれぬる。

これは、秋立つ日よめると題する藤原敏行の歌である。自然の微かな変化にも、敏感に反応する、古代人の研澄されたような鋭く繊細な感性や息遣いが直接伝わってくるようである。まさに、自然と人間との、渾然一体の中から、

生まれ出た爽やかな自然讃歌である。それに比べて現代人は、日夜仕事に追われ、商業主義が煽るレジャーブームに振り回されて心身をゆっくりと休める暇もない。必然に、自然と向かい合って静かに対話をする心のゆとりを失くしてしまっている。

季節はいま、夏から秋へとゆるやかに移ろいはじめているのである。

現代に生きる私たちは、自然の微妙な変化に感動する心こそ、ゆとりや豊さが宿ることを思い知らなければならぬ。

▼いま夏木立の中は、まるで行く夏を惜しむかのよう、に、蟬時雨が一頻りである。蟬は、六、七年もの長い間、地中で樹の根から養分を吸って育ち、地上に出て成虫になってわずか二週間でその一生を終えるという。外国では、十七年もの長い間地中にいるものもいるという

## 風立ちぬ

ことである。彼等にとつては、地上に出たこの極く短かい間に、次の生命を残していかなければならぬのである。何とも果無い哀れな一生である。その薄幸な定を知れば、時にはうるさくさえ感ずる彼等の鳴き声も、いとおしく思えてくる。この蟬と同じように総ての動物や植物は、峻厳な自然の掟に決して背くことなく、それを甘受し、与えられたままの生命を全うし、子孫を残し静かに果てていくのである。これ以上の潔さはない。人間の生きる道も、行きつくところ、この何ものにもこだわらない、泰然とした世界を求めているのだと私は思っている。

かつての就職難時代が、夢のようである。もしこのまま手を拱いていけば、急速に進行する高齢社会と少子社会によって、日本の繁栄は足下から崩れる危険性を孕んでいる。果して、日本の経済が今の状態で発展を続けられるのかという不安はあるが、それにしても、失業者を多勢かかえて四苦八苦している諸外国の状況を見れば、日本の今の姿は豊かさというよりも、むしろ異常といったほうが適切なのかも知れない。

▼最近の若者の就職指向は、この売り手市場を背景に、より高い給料で、より休暇が多く、その上きれいで格好の良い職場へと一斉に向かっている。当然のことながら、仕事とは単なる生活の糧を求める手段にすぎないと割り切った考えをもつ若者が多くなってきた。だから、男子一生の仕事などという感覚は、彼等にとつては、全くナンセンスなのである。

その証拠に、かつては不本意であった臨時職が、当今ではフリーアルバイターといって、

会社や上司に束縛されることなく、働きたい時に働く魅力あるものとして、もてはやされているのである。私は、これはそれなりによいと思うが、しかし、仕事は単なる生活の糧を得るための手段にすぎないとする考えには同調できない。なぜならば、その考えの裏には、金さえあれば、仕事などする必要もないという安逸で怠惰な人生観が潜んでいるからである。

私は、そんな人間は、空蟬と同じだと思う。現在、仕事に熱中し過ぎる人間を、仕事中毒、働きバチといつて、あたかも単細胞人間であるかのよう

に蔑視する風調がある。私は、これに対して素直には賛同できない。自らが選んだ仕事はなぜなら私は、生活の糧である以前に人生の道であり、天から与えられた使命だと思ふ一人であるからである。▼いま、田の面を黄金色に染めて輝く稲穂の波は、過ぎゆく夏と来たりし秋の行き交う場所であり、吹きわたる秋風は、蟬の余命を知らせる悲しい告人である。